

邱 君妮

1. 事業実施の目的

- (1) ロシア・モスクワでの現地調査
- (2) 国際博物館会議の都市博物館国際委員会 (ICOM-CAMOC) の年次大会での成果発表

2. 実施場所

ロシア・モスクワ：
モスクワ博物館
コロームンスコエ野外文化財博物館
ツァリツィノ公園

3. 実施期日 平成 27 年 8 月 29 日 (土) から 9 月 7 日 (月)

4. 成果報告

●事業の概要

平成 27 年 8 月 29 日から 9 月 7 日にかけて、ロシアのモスクワにおいて現地調査と研究発表をおこなった。まず、「歴史的建築物の保存・活用に関する博物館」について、モスクワ博物館と、コロームンスコエ野外文化財博物館及びツァリツィノ公園で実態調査をおこなった。その後、国際博物館会議 (ICOM) の都市博物館国際委員会 (ICOM-CAMOC) の年次大会において、「City Museum, City Memory, and People of the City」と題した研究発表をおこなった。

●現地調査について

文化遺産を保存・継承するための博物館のあり方の可能性を明らかにするためには、より広い視野で分析することが必要とされる。そのため、今回の調査では、1) 歴史的建築物を転用した博物館—モスクワ博物館、2) 歴史的建築物の移築保存—コロームンスコエ野外文化財博物館、3) 歴史的建築物の現地保存—ツァリツィノ公園の 3 つのタイプの歴史的建築物博物館を事例として、それらの博物館の実際の状況について、調査をおこなった。

1) 歴史的建築物を転用した博物館—モスクワ博物館

モスクワ博物館は、モスクワ最古の博物館の 1 つである。同博物館の歴史は、モスクワの都市発展と深い関連を有しており、モスクワ市の歴史展開の象徴でもある。博物館は設立以来、数回にわたり、その場所と名前を変更し、現在に至っている。

博物館は 2008 年、「モスクワ博物館」に改名し、2011 年に帝政時代の倉庫及びその衛兵

所に移転した。これらはモスクワ出身のワシリー・ペトロビッチ・スタゾフの設計によって、1835年に建てられた歴史的建築物である。今回、現地調査をおこなった際、博物館の内装はまだ完成しておらず、広場と一部の空間しか公開していなかった。館の学芸員に尋ねたところ、博物館は2020年の完成を予定しているとのことである。

モスクワ博物館は、モスクワの歴史を踏まえ、移転を機に使命を見直し、改めて「都市と市民のすべてについて」をコンセプトとして、過去、現在、未来の3つの視点で年間約20回の展覧会や50回以上の文化活動などを通じ、モスクワの都市の発展を紹介している。さらに、「モスクワの名刺」というスローガンの下、博物館を通じてモスクワを紹介する使命を果たすため、博物館の中にシティーツアー・デスクを設置し、モスクワバス・ガイドやウォーキング・ツアーなどを企画している。

実際に、モスクワに滞在している期間中に、モスクワ博物館が主催し、博物館の広場で開催する「市場」と「モスクワ都市の日」の2つのイベントに参加し、観察をおこなうとともに、活動に参加する人々への聞き取りを通じて、モスクワ博物館について、下記の2点について調査することができた。

①博物館は明確な使命を示し、展示、教育などの博物館活動は使命に合わせて行うこと、さらにこれらの活動は市民生活のニーズに密着しているため、活動に参加することによって、楽しく文化や歴史について知識を身につけることができる。

②モスクワ博物館とその周辺の6つの歴史的建築物から転用した博物館を博物館群として発展させ、これらの博物館を中心に様々なイベントを企画しており、館内だけではなく、地下鉄や市内の公園などでもイベントを開催している。モスクワ博物館は、歴史的建築物を保存し、建物を転用した博物館でありながら、他の博物館とネットワークを形成することにより、活動の場を歴史的建築物という空間に制限をすることなく、都市そのものが博物館の場であるという概念で発展している。

2) 歴史的建築物の移築保存ーコロームンスコエ野外文化財博物館

コロームンスコエの名称は、モスクワ南東部コロムナ街道の起点であったことに由来し、コロームンスコエ市は1960年代にモスクワ市に合併された。コロームンスコエ野外文化財博物館は、モスクワの中心部から南へおよそ1時間、地下鉄の最寄り駅から徒歩5分程度にある256.77ヘクタールの広さをもつ公園である。

元々同館の地は、14～17世紀に歴代モスクワ大公によって、コロームンスコエの離宮が造営された場所であり、1923年1人の建築士ペトロ・バラノフスキーによって、1つの博物館が設置されたことをきっかけとして、1925年にモスクワ市政府によって野外文化財博物館とされ、往時の建築が保護された。また、ソ連国内の木造建築や石造建築が移築されるようになり、現在は特別史跡保護区に指定されている。

2005年、モスクワ市政府は新たに、園内の歴史的建築物と自然景観を総合博物館保護区とし、2008年には、3ヶ所の木造建築を復元することにより、園内に新たな木造博物館が設置された。さらに2010年、当時の建築プランに基づいて17世紀の木造離宮が復元され

たが、木造離宮の遺跡を保護するため、復元された木造離宮は元の場所と離れた場所に建てられた。

現在、広大な緑地が広がる園内には、31カ所の遺跡、歴史的建築物や16カ所の自然景観のほか、事務所とホテル、交番等が設置されている。50種類以上の有料ツアーが提供され、夏にはコンサートやフェスティバル、見本市などがおこなわれる。

コロームスコエ野外文化財博物館について、現地で調査をおこなうとともに、地元のインフォーマントへの聞き取りを通じて、下記の3点について調査することができた。

①総合博物館保護区 (integrated museum reserve) という概念は2004年、国際博物館会議から提唱され、従来のエコミュージアムの概念を拡大し、収集・保存、展示・教育から、危機管理などを含むミュージアムの概念である。コロームスコエは2005年から歴史的建築・考古・遺跡・自然地域を一体として総合博物館保護区を実践しており、実際の取組の事例として、文化遺産を保存・継承するための博物館のあり方を検討する上で大変参考になる。

②野外文化財博物館の展示内容については、31カ所の遺跡、歴史的建築物のうち、16ヶ所が公開見学や博物館となっている。展示の仕方は主に、

- 歴史的建築物をそのまま展示する（またはその内部を公開する）。
- 歴史的建築物を転用し、本来の用途と直接関係のない展示をする博物館（たとえば、ヴォズネセーニエ教会の前に移築された城門は、コロームスコエで発掘された資料を展示している）。
- 歴史的建築物と関連のある絵画、彫刻、民芸品などを展示する博物館。
- 歴史的建築物の用途を引継ぐ（たとえば、現在でも礼拝に使われている教会建築）。

以上のように、総合博物館保護区として全体的な配慮をしながら、様々な展示を取り込みつつ、無理にすべての歴史的建築物を公開し内部に再現展示をするのではなく、歴史的建築物とその周辺環境の歴史・文化を中心として表現するという展示の仕方がなされていた。

③博物館のマネジメントという視点からみると、まず、地下鉄の駅から博物館への行き方の外国語標示がなく、園内では、外国語表記もわずかしかない。また、入園無料だが、共通券のようなものがないため、博物館に入館するためには個別に各ゾーンにあるチケット・ブースで入館チケットを買う必要がある。一方、調査の際には、多くの児童生徒や地元の団体等の訪問者が訪れていた。地元住民のインフォーマントによると、多くの人が休日に、この公園を散策し、食事をしたり、行事に参加したりする地元の人々の生活に密着した施設となっている、とのことである。コロームスコエ野外文化財博物館は、世界遺産を含みながらも、あまり観光地化されておらず、地元の歴史や郷土学習の場のみならず、生活と関わる場として運営されている事例として、野外文化財博物館の展示のあり方を検討する上で参考となるであろう。

3) 現地保存ーツアリツィノ公園

ツァリツィノ公園は、モスクワ中心部から地下鉄でコロームンスコエのさらに南へ行ったところにある。ツァリツィノ離宮とその自然景観を含め、面積は550ヘクタールに及び、モスクワ最大の博物館保護区として、入場は無料となっている。

ツァリツィノ離宮は、もともとエカテリーナ2世が1775年から建築を開始した。建築はゴシック様式で、著名な建築家であったバジェノフが担当し、ようやく1794年に外装が完成した。その後、建物は放置され、廃墟のまま一部は地元民によって使われた後、より精巧な装飾を加えて1980年代から少しずつリニューアルされ、2007年のモスクワ建都860年を記念しておよそ200年越しに完成した。

ツァリツィノ公園について、実地調査をおこなった結果、下記の2点について調査することができた。

①博物館保護区として、かつての建物の礎石の跡も残しながら、ツァリツィノ離宮の建築のみならず、警備兵の詰め所や温室、豪華な煉瓦のアーチ橋を含め、離宮の周囲の歴史的景観及び森の中にある歴史的建築物も復元された。また、離宮と周辺の歴史的景観にあわせるため、公園の入口や園内施設の設計も配慮がなされている。復元された景観の保護ため、離宮の近くにはガラス造りの建物を設置し、地下の入り口から宮殿内部にかけて有料の博物館となっている。このように、歴史的建築物と景観の一体性を考慮しながら復元や保存をすることは、自然と来館者に歴史像を理解させることにつながっていると、報告者は考えている。

②広大な園内には、野外コンサート会場やレストランなどの施設が設けられている。それらの施設は、有料のカートで回ることができる。離宮裏手の森林や池などを回るといかに広い敷地であるかが実感できる。調査の際、園内には、多くの人が読書したり、ローラースケートや自転車、ジョギングなどを楽しんだりしていた。また、結婚記念の撮影のためにツァリツィノ公園敷地内の教会や鐘楼が現在も使われており、市民の憩いの場となっている。コロームンスコエ野外文化財博物館と異なり、こちらは外国語の表記及びガイド情報が整備され、観光名所でありながら、商業主義に寄り過ぎない野外博物館の1つの事例として参考になる。

●学会発表について

上記調査の後、9月2日～4日に、モスクワ博物館で、「記憶と移民(Memory and Migration)」をテーマとするICOM-CAMOC(国際博物館会議・都市博物館国際委員会)の年次大会に参加し、発表をおこなった。CAMOCは2005年に発足したばかりの新しい委員会で、今年がちょうど十周年に当たることから、第1回の会議が開催されたモスクワで、再び記念大会を開催した。

会議は、1)移民、都市と都市博物館、2)記憶の中心及び包摂の場としての都市博物館、3)変化する都市における議論と社会的参画の場としての都市博物館の3つのテーマに基づ

き、6つのセッションがおこなわれた。

筆者の発表は、2) 記憶の中心及び包摂の場としての都市博物館のセッションにおいておこなわれ、これまで台湾新北市にある淡水古蹟博物館において調査した結果を、「博物館、記憶と都市の人々 (City Museum, City Memory, and People of the City)」と題して発表した。

ここでは、博物館は、行政が作り出した歴史表象と研究成果によって明らかにされた歴史、及び地域住民の間で蓄積された記憶の接合の場となることや、博物館はいかに有形及び無形を含む文化遺産との付き合い方を見直すべきか、という課題などについて報告をおこなった。

従来、「記憶の中心及び包摂の場としての都市博物館」に関する研究は、主に来館者に重点において、博物館教育普及活動などを通じて人々と交流すること、また、市民参与という形で博物館活動をおこなうことについて考察するなどのテーマを中心に展開されてきた。

そのため、今回の発表において、報告者は、学際的な視野をふまえて、従来の博物館学調査ではなかなか取れない視点—博物館非来館者の地域住民から分析し、さらに、行政が作り出した歴史表象と博物館の研究成果という三者を合わせて考察した結果について報告した。新たな研究視点を加えて試みた点について、発表の後、会議の参加者から多くの質問や意見が寄せられた。たとえば、地域住民からデータを得る研究方法や、地域住民の間で蓄積された記憶が博物館の展示に見えないこと、あるいは日常生活と博物館との関わりについての状況や、淡水古蹟博物館の来館者が博物館活動に参加する状況などである。

そのほか、ほかの参加者の研究や事例報告により、オランダ、ドイツなどの博物館活動に関する情報、博士論文研究の比較検討資料を入手することができた。最後に、会議で実施された「都市博物館を見直す」、「都市博物館と景観」、「都市博物館とネットワーク」の3つのワークショップにも参加し、積極的に台湾と日本の博物館事情を説明し、参加者と議論をおこなった。最終日には、博物館見学（考古学博物館、トレチャコフ美術館、東洋美術館、歴史博物館、プーシキンの家の博物館）にも参加した。

●本事業の実施によって得られた成果

1) 文化遺産を保存・継承するための博物館のあり方の可能性を明らかにするためには、より広い視野で分析することが必要とされる。今回研究発表を行うとともに調査をおこなった結果、博士論文を執筆する上で参考となる日本では入手できないモスクワ博物館事情、研究資料や情報を収集することができた。これらの資料は、今後、博士論文研究をさらに展開していくための重要な素材となり、博士論文研究に還元することが期待される。

2) CAMOC 年次大会で発表するとともに、博士論文と密接に関係する「文化遺産、都市、博物館、コミュニティ」をテーマとする討論会及び博物館見学に参加することにより、博士論文研究の分野に関する貴重な情報を収集することができた。今回、最大の成果は、日本ではなかなか交流できないヨーロッパの博物館関係者・研究者との交流ができ、異なる視点から自分の博士論文研究を見直し、今後の研究内容及び成果の応用などについての建

言もいただいた。さらに、継続的に議論や交流ができるよう、今回の会議参加者を中心とする研究ネットワークに加入することにより、今後、研究者としてのキャリア形成にも寄与することが期待される。

3) 発表結果に基づき、論文内容を修正し、中華民国博物館学会の「博物館研究」雑誌にレポートとして投稿する。また、来年 12 月までに、全日本博物館学会の「博物館学雑誌」に査読論文として投稿する

●本事業について

本事業は、学生にとって、博士論文執筆のために国内や海外で調査を行う上で、必要な交通費や宿泊費が支給されることから、極めて有益かつ必要な制度である。経費面で大変助かっただけでなく、今後さらに博士論文の研究を進めていく上で、海外の多くの専門家と交流でき、刺激を受けることができるという効果もある。今回、このような貴重な機会を与えていただいたことを感謝するとともに、今後も引き続き、ご支援をよろしくお願ひしたい。